

とって 隠岐 四島巡り

クラブツーリズム大感謝祭 IN 隠岐と名うったツアーに4月17日~19日参加した。二泊三日で隠岐の島、西ノ島、中ノ島、知夫里島の四島を回ってすばらしい景色とすばらしい料理、そして後鳥羽上皇にまつわる史跡の数々と、隠岐国分寺では蓮華会舞、牛突き、隠岐民謡の郷土芸能を特別観賞するなど満足できる旅だった!!

隠岐の今と昔

島根県の隠岐は人の住む四島と180の小島からなり、道後(どうご)と島前(どうぜん)に分かれている。最も大きな隠岐の島を道後、西ノ島、中ノ島、知夫里島を道前と呼ぶ。それぞれ隠岐の島町、西ノ島町だが、中の島は海士町で、知夫里島は知夫村となる人口は合計して26,000人だ。ここからさらに156km沖合いには、日韓が帰属を主張しあう竹島がある。



この隠岐諸島は火山の島である、最も今は死火山なので噴火の心配はない。島前の三島を結ぶのが外輪山である、島後にも二つの噴火口をもっていた。島の周りには暖流の対馬海流がながれ、冬でも雪は少ない。それに大陸棚は豊富な海の幸に恵まれている。

古くは大陸外交の寄港地として、また江戸時代の帆船航路のころは風待ち港として重要な港であった。そのため各地の船頭さんにより多くの民謡が伝えられ、今もしげさ節、どっさり節、隠岐祝い音頭などが歌い継がれている。

そしてもう一つの特徴は隠岐は流人の島だったことだ。724年に公式に流刑地として定められた。以来、江戸時代末期まで主に身分の高い政治犯が流されてきた。流人の第一号は柿本人麻呂の子供だったという、その後約1150年間続いた流刑としての歴史は、文化の流入など隠岐の風土を形作る一端を担ってきたのだ。後鳥羽上皇と後醍醐天皇の流刑はあまりに有名な歴史の一コマである。そのため多くの文化が残った、これが「おきみやげ」というわけである。

名古屋を 7.30 の新幹線で新大阪へ

東浦を 6.01 の一番電車に乗り名古屋へ、いつものことだが東浦駅は閉まったままだ。自動券売機があってもこれも格納されていて使えない。何のために設置しているのか??人が配置できない時などのために自動券売機はあるのではないのか、これでは無駄な投資をしているだけだ。JRはもっと利用者の立場で運営を考えることができないのか!! まことに腹立たしいかぎりだ。ひかり 393号は34名のツアー客を乗せて定刻に出発、席は14号車14DE。名古屋始発でもありわれわれの乗った車両以外はかなり空いていた。まもなくして羽島駅のすぐ手前で列車は完全に停車した、信号故障とアナウンスがあった。しかし、じきに動き出したのでやれやれと一安心。

8.36 定刻より2分ほど遅れて新大阪駅に、ここよりバスで中国自動車道を走り米子自動車道へ入り、境港を越えて七類港へ向かう。

桜とつつじが美しい中国自動車道

バスは岡山からきた両備バス、ドライバーは高杉運転手。移動だけなのでガイドさんは乗っていない。でも高杉運転手は所々で説明を入れてくれる。出発して国道2号を走り高速と並行して走る、大阪モノレールもしばらく並行している。1時間ほどで高速に入りこのあとは順調に走る。神戸JCを過ぎた辺りから道の両側に、赤紫色のつつじが綺麗に咲いている。なかには山の上まで赤紫色になっている、とても美しい眺めだ。自然が作り出す芸術といえる。

10.00に加西SAにてトイレ休憩の後吉備路を走る、この辺りからは桜が綺麗に咲いている。山間部は気温が低いいため桜の開花も遅いようだ、満開を少しすぎたところでまだ十分に綺麗な眺めだ。

加西SAを出発して配られたお弁当を早速食べた、朝早かったので丁度よいタイミングでおいしかった。つつじ、桜と綺麗な花々を眺めているうちにバスは米子自動車道へ入る。当然片側一車線と思っていたが、なんのなんのほとんどが片側二車線の立派な道路だった。でも交通量はさほど多くはなく、一車線で十分な道路だ。

伯耆大山が見え隠れする11.50蒜山SAに到着、トイレ休憩の後いよいよ七類港へ向かう。



蒜山SAからの大仙



大山PAからの大仙

順調に走ってきたので高杉運転手の配慮で大仙PAにも臨時に停車、まるでその姿を変える伯耆大山の裏表の姿を、コーヒーを飲みながら堪能することができた。米子ICを出て防風林の松林の続く道からは、砂浜と美しい日本

海が見え隠れしている。松林は幅が狭いのだ、唐津の虹の松原を走ったときはとても広いと感心したものだが、ここはそれほどではなかった。境港を橋の上から眺めながら湾を渡り、七類トンネルを抜けると日本海の七類港に 13.25 到着した。

高速船で 70 分 隠岐西郷港へ

高速船のレインボー2 はクラブツーリズムのチャーター便である、よく考えたもので東京、大阪、名古屋でツアー客を集めているのだ。東京がバス 2 台、大阪と名古屋がバス 1 台のお客というから全体で 150 名ほどの団体になっている。定期の高速船は一日一便しかなく、四島巡りのコースはうまく組めない。そのためこのような人数を集めてチャーター便を運行する、あるいは隠岐観光協会と折衝して特別企画をするなどの工夫がされている。出発までの時間はターミナルをぶらついたが、高速船の料金は一人 4990 円でフェリーの二等運賃は 2500 円となっていた。高速船の運賃はかなりの金額といえる。またターミナルには美保の隕石が展示されているが、入館料が 600 円と高くあまり見学した人はいなかったようだ。200 円～300 円位にすればきっと多くの人が見学して、売り上げは伸びると思うのに商売がへたなこと。



七類港のターミナル



隠岐西郷港の歓迎

14.10 われわれを乗せた高速船レインボー2は予定通り七類港を出港、まもなく船長から「ただいま船体を3m浮上させて70kmで走行しております、緊急時に備えシートベルトを必ず装着ください」とアナウンスが入る。さすがに鹿児島沖での事故を知っているのだから、全員シートベルトを着装している。一般の船と違い走行中にうろろうろすることはできないのだ。外洋を航海しているのだがほとんど揺れはない、快適な船旅である。そして1時間ほどで隠岐の島西郷港へ入港。岸壁には幟旗がひるがえり、隠岐太鼓を打ち鳴らして歓迎してくれた。ちょっと感激である!!。

桜と鶯が迎えてくれた国分寺

さっそくバスで国分寺へ移動する、ここは後醍醐天皇の行在所があったとされる所だ。隠岐唯一の国道485を走り、着いたお寺は桜が満開でおまけに鶯が鳴いている。梅に鶯と思っていたが隠岐では少しずれているようだ。本堂と史跡国分寺跡を見たあと蓮華会舞、牛つき、隠岐民謡の特別鑑賞があった。国分寺は今日の県庁のような存在で政治経済の要であった。島根では石見出雲、隠岐に国分寺がおかれた。しかし、神仏分離令による廃仏毀釈のため隠岐にあった99のお寺は全て焼き払われた。そして明治16年お堂だけが再建されたのである。

蓮華会舞とは

奈良から平安時代にかけて古代中国、朝鮮、インドシナ、ビルマ、印度などから伝わった珍しい舞と音楽を一緒にした無言の仮面劇である。



国分寺の入り口



麦焼き舞

演目は「眠り仏」「獅子舞」「麦焼き舞」「竜王の舞」などがある。桜の花の下紅白の幕が囲む特設の舞台を前に、住職が巧みな話術で蓮華会舞の解説をしてくれた。小学生が麦焼き舞を、高校生が竜王の舞を演じてくれた。麦焼き舞は猿のような面を被り、農耕のしぐさが入った舞で五穀豊穡を祈るもの。一方竜王の舞は不細工な面構えの面を被り、舞台を飛んだり跳ねたりするしぐさと、間抜けな面でじっと客の方を見つめるしぐさが面白い。いずれも笛5人、太鼓1人、シンバル1人の舞楽演奏に合わせて練り広げられた。通常は年に一度の演舞なのだが、特別上演を見られてとても幸運である。

牛つき

今から約780年前の承久の乱で隠岐へ流された、後鳥羽上皇が牧畑を散策している時に、牛と牛が角を絡めているのを見て喜ばれた。それを村人が展覧に供したのが始まりとされる。

現在は島後にしか残っていないが牛は牛つき専用飼われ、大きいものでは1トンにもなり、その迫力はすごい。これも特別に見せてもらえたことはいずれの限りだ。しかし、見ているとなぜか牛があわれでもある。何のために牛はやらされているのか、分かっているのだろうか？自然の闘争本能がかりたてているのだろうか？ほかには四国の宇和島でも見られるが、動物愛護協会からクレームがきてもよさそうなものだ。

すばらしい「祭り料理」

このあと隠岐民謡を聞いて今晚の宿に向かった。大きな宿がないため34名は10名と24名の2グループに分宿となった。奥津戸地区はアイランドパークに10名、われわれ24名は屋那の松原に建つ公共の宿「羽衣」で、しまね故郷料理認証店の肩書きがあった。

海に面して松原と舟小屋に囲まれ、とてもすばらしいロケーションを誇っている宿に18.00到着。大広間に行くとも部屋別にテーブルが準備されていて、たくさんの料理が並んでいる。私好みの海鮮料理である、まずは殻つきのイワガキ、ヒオウギ貝、サザエ。刺身はアワビ、イカ、アジ、ブリ、タコが並び桜の枝が添えられている。この桜の花の添えられているのがにくい。



珍しいのは亀の手の吸い物、さらにこれは初めて食したがウミウシ(ベコ)そしてぶつぶつに切れた 100%そば粉のそば、これは鯖のだし汁と、厚切りの混ぜご飯の海苔巻きが 2 個。この料理は娯楽の少なかった時代に祭りの席で振舞われた、豪華なおもてなし料理だという。海の恵みを満喫した夕食に満足満足!!

明日は島後の端から端まで見て中ノ島を見学、そのあと西ノ島へ入る。

二日目 4月18日

部屋の大きなガラス窓からは、静かな青い海が広がりすばらしい眺めの中で朝を迎えた。日常とは違う旅のよさというものだ。

歴史と自然こそ島の宝

朝、宿の周りを見てみると綺麗な海がとても印象的で、岸边だけでなく川の中まで牡蠣がぎっしりついていて。宿の前の入り江には明らかに観光用と思われる新しいつり橋が架かっている。

橋がなくてもなんら困らないと思うし、今ある道を改良すればどうってことはないのにと分かる。少し離れた所には伊根湾の舟屋より、小ぶりだが舟のみを入れる舟小屋がくたびれた姿で建っている。早く修理をして維持してほしいものである。宿の隣、船小屋の隣にも立派な松林が続いている。これは

昔若狭の国から来て、800歳まで生きた百比丘尼が島内の各所に植えた松の一部と伝えられているもので屋那の松原と呼ばれている。

とはいえ要所要所にシンボリックな目立つものがあることも悪くはない。これも離島ゆえの観光対策というのかな。

白島展望台は黄砂に煙る

8.00に宿を出発して隠岐の島巡りは島の最北端、白島展望台へ向かう。ここは白い岩肌と、緑の松海の青さのコントラストが美しい女性的な海岸として知られる。国道485を北上しのどかな田園の中を走る、すでに田植えの準備が進められている。しばらくは2車線道路だったが、ほどなくバス1台しか通れない道になり所々で改良工事も進めている。峠のヘアピンカーブでは大丈夫かなと不安になるくらいだが、そこはプロの運転手さんこともなく車を進めていく。

まもなく五箇地区を通り抜けて白島展望台に到着する、すばらしい眺めがあるのにどうしたことか辺り一面ぼんやりとしている。お天気はそんなに悪くはないのに、黄砂の影響なのだ。



黄砂にかすむ島影

緑と青が黄ばんでいては、すばらしい眺めに程遠いのだ。ちょっと残念だ。中国もここまで意地悪するとはますます好きになれない。

展望台への小道は整備中だったが、砂できれいに固められていて歩きやすくその脇には小ぶりのすみれがたくさん咲いてとても可愛らしい、花は小さいねと話しながらくると、工事をしている人が「隠岐タンポポは花が大きいよ」と話してくれた。でも周りにタンポポの花は見当たらなかった。

「水若酢命神社」と「隠岐郷土館」「五箇創生館」

水若酢命神社の本殿は隠岐造りで国の重文に指定されている、おもしろいのは屋根が出雲大社、ひさしは春日大社、社は伊勢神宮を模しているというのだ。何と欲張りというかすごい神社ということになる。早速いつものように家族の健康と息子の結婚が早く決まるようお願いをした。

その隣には緑の芝生の中に二階建ての白い洋館が建っている、これは明治18年に隠岐四郡町村連合会により建てられた郡役所の庁舎である。島根県下における明治初期の洋風木造建築様式を伝える唯一の物となっている。この建物が博物館として活用されて、農業、漁業、畜産、鉱物、郷土芸能などに関する品々が展示されている。ここで分かったのは島でありながら、水田は1500ヘクタール、山地は牧田(こちらでいう棚田)に利用されて4000ヘクタールを越えたといわれる程農耕は盛んであった。さらに庭の隅に大きな丸太舟が展示してあり「**夢さそうロマン からむし二世号**」とある。何かと思い説明板を読んでみると-----

- * 松江市の小学校の教員11名で組織した「縄文時代の一日を再現する会」が、からむし会。
- * 古代人たちが黒曜石をたずさえて交流したであろう、隠岐と本土との海の道を再現しようと試みる。
- * もみの木をくりぬいた全長8mの丸木舟「からむし二世号」に5人が乗り込んだ。
- * 昭和56年7月、2日と9時間をかけて隠岐西郷港から七類港に到着。こんな内容で長さ8m、幅0.64m、深さ0.44mの丸木舟は極めて安定がよかったと記してある。その隣には移築した古民家があり、昔の農家の生活を再現していた。出入り口が三箇所もある大きなもので、西郷町都万目の日野家の母屋だ。ここでは皆屋敷に上がってお茶をいただき、古民家の居心地をあ

じわった。そして桜の並木を少し歩いて五箇創生館へ。ここは隠岐の自然、牛突きとこれは知らなかったが隠岐独特の風習をもつ「古典相撲」をメインに映像を中心に紹介している。



ハイカラな郷土資料館



桜とからむし二世号

古典相撲は地区最大の祭りのようなものだが、選手の選抜は単に強いだけではなく人格を認められた者が最高位の大関となる。この選手の選抜じたいがすでに村の祭りであり大切な行事になっている。

肝心の勝負は二番勝負で、一番目の勝負に勝った者は次の勝負では負けることになっているのだ。つまり一勝一敗の引き分けにすることで、狭い島の村同士のいがみ合いをしないようにと考え出されたものだ。とはいえ初めの勝負に勝つように、頑張ることは言うまでもない。そして勝者には土俵の柱が与えられるという。

ここから来た道に戻り玉若酢命神社へ向かう。

樹齢 2000 年の八百杉と 駅鈴の玉若酢命神社

大きな鳥居のまえには桜が咲き誇る玉若酢命神社は国道沿いにある。ここは隠岐の総社として創建された古社で本殿は独特の隠岐造りである。鳥居をくぐり桜並木の横を行くと茅葺の門があり、その奥には樹齢 2000 年といわれる天然記念物の巨木「八百杉」がそびえている。あちこちにつかい棒をして倒れるのを防いでいる。本殿ではあきもせず水若酢命神社と同じこ

とをお願いした。これだけお願いすれば神様も気がついてくれるのではと思っているのだが。お参りのあと隣にあるこの宮司であった億岐家の住宅を見学、いまも使っていることから外からのみの見学だが、それにしても立派な古い建物だ。玄関は三つあり、身分により使い分けていたという。さらに隣には宝物館がありここにもすばらしい品々が展示されており感激した。

駅鈴 その昔役人が宿場から宿場を移動するのに用いた身分を証明する鈴。

全国でも隠岐のほかには二箇所しかないという。その音色がまたよい、テープで聞かせてもらえたが澄んだ高い音は確かに鈴の音である。



隠岐国駅鈴



古いはがき

何故テープかという、中の玉が磨耗するから鈴を振らないように学者先生から要請されたのだという。昔の20円葉書のデザインはこの駅鈴が用いられている。億岐家当主が説明してくれたのだが、残念ながら隠岐国倉印はどんな物かよく分からなかった。でもカメラOKはうれしかった。そして西郷港から11.55のフェリーで中ノ島へ向かった。

後鳥羽上皇が暮らした中ノ島

定期便のフェリーは西ノ島の別府港へ寄港してから中ノ島の菱浦港へ入る。この間1時間45分を要する、そのため船の中でお弁当だ。黒い海苔を一面にまいた丸いおにぎり二個、アジの丸干し一個とたくあんふた切れ。

とても素朴だが海苔の香りがよいおいしい弁当だった、そして食後にはこの旅で初めてレギュラーコーヒーを飲んだ。

13. 40 菱浦港に到着、早速バスで隠岐神社へ向かう。その間にもガイドさんが中ノ島について説明してくれたのは――

- * 地元の隠岐島前高校はレスリングが強くて県外からの生徒も多い
- * 地元の言葉――「だんだん」→ ありがとう 例;だんだん、またござらっしゃい
「おはこどころ」→ トイレ この言葉は宮中言葉からきている
- * 当地村上家の 49 代当主に嫁いできたのが、芸能人の西川峰子さん。一ヶ月のうち半分くらいは滞在しているとか。

後鳥羽上皇と隠岐神社

隠岐神社前でバスを降りて最初に行ったのは、後鳥羽上皇火葬塚。ここで火葬にされて埋葬されている所だ。鳥居と土塀があるだけで何かよく分からない。その場所から少し離れた所に行在所跡がある、石柱で囲われただけの広場である。ここは源福寺のあった場所で、いずれも皇室にまつわる場所のため立ち入りは出来ないし、枯れ木とて持ち去ることはできないとの説明だった。この源福寺は隠岐島第一の古刹であったが、明治初年の廃仏毀釈により取り壊されている。

そこから鶯の鳴き声が聞きながら隣の隠岐神社へ、ここは後鳥羽上皇を祀る神社で没後 700 年を記念して建立されたものだ。こんな小さな島にと思うほど立派な建物だ、庭にはタブの木、モチの木と隠岐で一本しかないというユーカーリの木、松ぽっくりが大きい大王松などが茂る。立派な拝殿ではまたまた同じことをお願いした。



後鳥羽上皇火葬塚



左が蹴鞠

海士町歴史民族資料館

道を隔てた反対側にある資料館を見学する、ここには後鳥羽上皇に関する隠岐神社の宝物などが展示されている。多くの書がある中で最も記憶にあるのは、蹴鞠である。ほんとにこんな物で遊んだのかと思った。学のある人ならさしずめ和歌の一つや二つ紹介するところだがあいにくと趣味ではない。

こうして1時間30分の見学後チャーター船で菱浦港を15.10に出港、西ノ島の浦郷港へ15.40到着した。

二日目は隠岐の島、中ノ島とめぐり西ノ島へやってきた。これから赤尾展望台と国賀浜を見学して浦郷港へ戻り、産直市が開かれる。三日目は国賀海岸の遊覧船めぐりと、知夫里島をたずねる。

イカの雌は賢く、雄はあほ

バスが走り出してじきに由良比姫神社がある、大きな桜の木は満開の花をつけている。漁業、海上の守護神として信仰を集めているという。そばの入り江は「イカ寄せの浜」と呼ばれ、イカの群れが押し寄せてくることで有名な浜がある。入り江にはイカをとる人形まで置いて、かたわらにはイカの模型がたくさん並べてある。説明では一般の人が軽トラック一杯のイカを捕まえたこともあるという。ここに来るイカは赤イカで必ず雄雌いるので、雌から捕まえるのだとか。何故かという、雌を捕まえると雄はうろうろ雌を探

しているが、雄を捕まえると雌はさっさと逃げてしまうそうさ。人間社会ともどこか似ていて考えさせられてしまう話ではある。

赤尾展望台と国賀浜

バスは海岸から山の手に向かい、急坂をどんどん登っていくにしたがい青い海が広がってくる。尾根を走るスカイラインからの眺めは抜群だ。展望台に着くと風が強い、とても強い。帽子などはかるく飛ばされそうなので脱い



国賀浜の通天橋

で外に出た。それでもあまり風が強いのでみんな写真を撮るとすぐにバスへ戻ってきた。登ってきた道を引き返し一旦街中まで戻り、そして方向を変えて国賀浜へ向かう。国賀トンネルを抜けてまもなく駐車場に到着すると、目の前に大海原が迫り見事な景色である。思わず深呼吸したくなるような気分、海岸まではここから10分ほど下へ降りていく。

岩石の中央が自然の侵食作用でえぐられた大きな岩の架け橋、通天橋をはじめとしていろいろな形の岩が横たわる姿は圧巻だ。明日はこの海岸を海から見学の予定である。

クラブツーリズム産直市

17.00 に浦賀港に戻ると、隠岐観光協会とクラブツーリズムの産直市が待っていた。最初はイカの一晩干し作りの体験があり、妻が挑戦した。漁協の方の手ほどきを受け、胴体を開き足を取り目玉を取ってから内臓を切り離すのだ。初めはなかなか手順が呑み込めず、迷っていたようだが次の二匹目は割とスムーズにできたようだ。

このイカは明日帰るときに、お土産としていただけるというから楽しみである。イカ開きの次は早速、いい臭いがしている焼き牡蠣をいただくことに。焼きたての牡蠣にレモンをのせてくれる、案内では一個 200 円だったが二つ注文するとそれぞれ一個サーピスして四個くれる。さらにひおうぎ貝も注文した。新しい貝をその場で焼いて食べられるのは幸せを感じる一瞬でもある。今回の産直市にはセリも行われており、多くの人が集まって賑わっていた。何しろこの産直市のため一人 1000 円のお買い物券がつくサービスぶりでの入れ方が伺える。

魚を買う気はなくセリには参加しなかったが、岩海苔、小魚の佃煮をお土産に買った。



産直市の様子とイカをさばく二人

アワビのしゃぶしゃぶと松葉カニ一杯

18.30 宿に到着、港を見下ろす高台にある「国賀荘」で部屋からの眺めはすばらしい。お風呂を済ませて楽しみは夕食、席に着くと松葉カニが一杯あるのが目に付く。料理の品数はさほど多くはない、アワビはと見れば薄くスライスしたものが四切れのっている。だし汁に豆腐、野菜を先に入れてしばらくしてからアワビをしゃぶしゃぶとやって食べる。

柔らかく弾力のある歯ごたえに、ほのかに甘い感触は初めてのものだ。踊り焼きを一度食べたことがあるが、しゃぶしゃぶは今回が初めてであるだけに期待していたがまあまあかな。ほかにはぶり、イカ、ひおうぎ貝の刺身と天ぷら、碗蒸しに酢の物がついていた。こうしたツアーとしてはかなりの料理といえよう。

三日目 19日

お天気は快晴波は高いか!!

昨夜は風がありお天気によっては観光船が出ないかもしれないと、心配していたが幸いOKになった。高台にある宿から港まで歩き、7.55に船は出港して国賀海岸に向かう。大正6年に完成した船引運河を通して外海へ出るのが、この運河は幅12m長さ337m、深さは3m。したがって西ノ島は一つの島だったものが二つの島になったことになる。



断崖と奇岩が続く

運河を抜けると隠岐では珍しい砂浜がある、外浜海水浴場で夏には多くの人で賑わうそう。ここから左にターンして進むといろいろな形の岩が現われて、次には最高 300m の断崖が連なっている。これが魔天崖と呼ばれる名所だ。波はかなりあり船がスピードをだすと相当な揺れだ。

船頭は心得たもので船の右側の人と、左側の人にたいしポイントでは船を旋回させてお客さんにサービスしてくれるのだ。そして昨日陸から見た通天橋まで来た、海から見るとまた違う景色が見られるから不思議だ。ここまでが遊覧コースで帰りはハイスピードで来たコースに戻る、そして知夫里島へ直行した。

赤ハゲ山のすばらしい展望

9. 20 来居(くりい)港へ入ると目の前に大きなループ橋がある、伊豆にあるループ橋と同じだが高さは少し低いようだ。海岸まで山が迫っているためにこの橋が造られたのだが、島の反対側はリアス式海岸なので港は造り易いと思われるが、波の荒い外海ではなく内海になるこの地に造られたのだろう。早速乗り込んだバスは中型バスで、運転手は牧場経営をしている。観光シーズンだけは運転手の仕事をするという。ちなみに知夫里島の人口は 800 人で内 400 人は 65 歳以上の老人。牛は 500 頭、たぬきが 2000 匹とパンフレットには書いてあったが、飼育しているのか確認はとれなかった。

牛は黒毛和牛で 3 月～12 月の間は山で放牧し、自然分娩させているという。そして子牛を育てて各地へ出荷する、一頭 40～50 万円ほどでこれが神戸へ行けば神戸牛、飛騨へ行けば飛騨牛としてもはやされるのだ。

狭い道をバスは両側の家の屋根にこすりそうになりながら走る、まもなく学校が現われた。生徒 40 人、先生 17 人の小中学校だという。

家並みを抜けるとバスは山道を登っていく、すると青い海原が洋々と広がっているのが見える。とても美しい景色だ。そして牛もいる、時には道路を占領しておりバスを降りて牛を追わなければならなかった。さらに進むと緑の草原の中を行く道路は柵で囲まれており、牛ではなく人が牛から隔離されて



赤ハゲ山の展望台

いるのが分かる。赤ハゲ山の展望台に到着やはり風は強い、しかし抜群のロケーションだ。青い海に西ノ島と中ノ島が浮かぶ光景は何ともいえぬ美しさで、こんな所で昼寝なぞしたいものだ。

青い海と赤壁にピンクの野大根

次に向かったのは赤壁、ここは昭和 10 年国の天然記念物に指定されている。切り立った赤い岩肌で最も高い所は 200m もある、大部分はアルカリ玄武岩からなるが、多量の鉄分が酸化してできたものである。バスを降りて 150m 程歩くが、ここも放牧場の中なので柵の中を歩くのだが所々に牛のごちそうがあるので下を見て歩く必要がある。かたわらには野大根や名も知らぬ花が咲いており隠岐に来たことを実感する。

目の前に現われた赤壁は間違いなく赤い、周りの緑の草原と青い海のコントラストは抜群。自然の作り出した美しさほどすばらしいものはない。崖の縁にはピンク色の野大根の花が、これも美しかった。ひと時の観光ではよい所だけを見て帰るのだろうが、人の気持ちを豊かにおおらかにしてくれるのが旅。それでいいのだろう。

10. 50 来居港を出て浦郷港へ、昼食の後別府へ移動。別府発 13. 40 の定期便高速レインボーで七類港着 14. 40、さらにバスでひた走り新大阪へ。

ひかり 428 号は 21. 26 名古屋着、東浦 22. 21 着。無事に隠岐の旅を終えた。



青い海と赤壁



ちょっとピンボケですが



ピンク色がやさしい野大根の花